

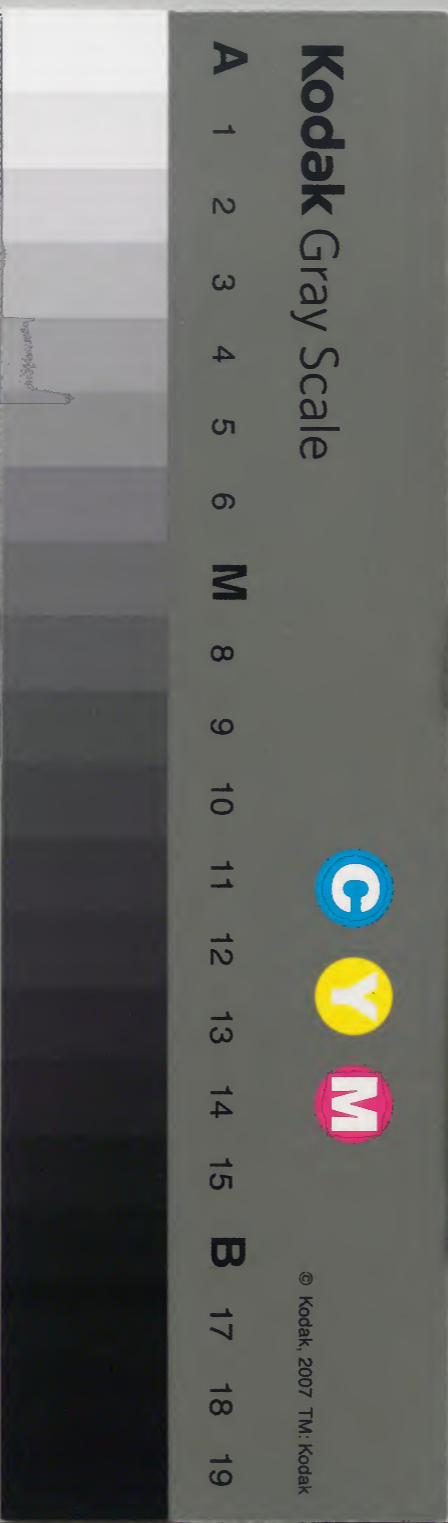
逸史譯本

十二

和書門			
二八	一〇	三函	類
一〇	一〇	三架	冊

內閣文庫			
二八	一〇	三函	和書
一〇	一〇	三架	冊

內閣文庫	
番號	和 28410
冊數	12 (12)
函號	150 35



竹山逸史卷之十二

目録

一 兩河所由凱旋の事

元和元年

一 大阪再び兵を擧る事

同

一 大坂夏河陣の事

同

一 豊臣家滅亡の事

同

一 大河所諸法度を定め

同

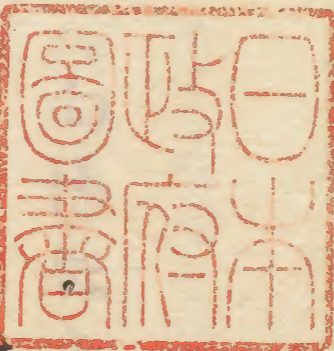
一 ありの事

一 忠輝卿罪状ありの事

同

一 太平の服を改る事

同



一大師所太政大臣不持—— 同

の事

一大師所亮去の事 同

一大師所亮去の事 同

一大師所亮去の事 同

一大師所亮去の事 同

一大師所亮去の事 同

一大師所亮去の事 同

竹山逸史卷之十二

竹山逸史卷之十二

向陽佐々木夏甫 譯

元和元年乙卯より同
二年丙辰四月まで記

元和元年乙卯正月三日 大律師京都所發駕岡

崎に逗留より——大坂の者孫を聞ゆひ大坂の堀ハ

よりつけ大坂大まて中ま二の丸の堀深く沙土乏しき

にあり 大君の所下知りて西の丸ありの矢倉校所の

類をくつし——此時埋め終り唯本丸に堀一ツのみ

あり十九日 大君京朝に所凱陣ありて諸國公

役を蒙る面より所暇玉り安藤直次をりて

いしし 忍河の所旅館につけとまつり又城
中より再び軍起り結核ありしは密命を命
とらふに密命初所旗本小幡勤三景憲といふ人
る武辺者といふ人もいれりつらつらあつて
前田家の扶持せしむる去冬大坂出丸の合戦と真矢
切てまゐる大野主馬をうらふて通れぬしき
あつたひかといひしりしは和隆の後忍川の役を以て
城中より入敵の密謀をききて高名とせんといせし景憲
これ幸ひに城中より入敵の密謀をききて高名とせんといせし
あつたひかといひしりしは和隆の後忍川の役を以て

んも立を後するは景憲と應云響の声と云するゆ
大野偽るるといふも心せしは是のこころのそま
らぬ事しとてかたしはるしこれより双方志の
この使往来絶たりきうて景憲は板倉勝重松平
定勝伏見市城代と兄系しありのゆかりありしゆれめ
らひかたりけりゆり城中の密事しこもくく露見
しゆめい安藤直次も密命を命め玉ひしり
廿四日市参内廿八日市参駕二日中泉より大市所より
對面あり十四日大市所駿府市帰城大君は江戸市
着し美濃加納城主奥平美作守信昌率去六十一才子息犬

膳大夫家改攝津守忠改の父より先づ卒去せし

忠改の男忠隆後飛騨守祖父につく廿二日備前國主侍

從弟左門督忠繼朝臣卒去つる十七才 大馬所内

悲歎大なるなり舎兄利隆は備前の國の事あり

らくゆはすき昔作下なる 今月又その母君しか

くれぬ大馬所第二の娘君織田侍從平長益入道有樂はこの

不と京都は身をひそめ年老より又サ出ら

まの卒去の後子息二人は父の遺領をもち左馬所依

長改は和州芝村一万石大和守尚長は同國柳本一万石

下今同井伊左近大夫直勝年ひさしく病あ

て舎弟掃部頭直孝兒の代官として軍切ある

より 大馬所の台命をて兒をかきり父直改の家をつ

きめらば直孝涙をながして兒を直勝年より病

まかり軍國のつとめよりけりしうりとをかせと

し 大馬所むし父を侍從に付させしゆひし

古き者も多くなりて家の事をいふ決しやるし

又直孝より上ハ天下の事ありあはれんは兄の代官

としてその者を引具しをせ向ひんん事去冬の

如くはこれにしるる 信じて兄をてり者を

あうそけ父の家をつらん事のをむ所はこれと辯

しやうきせに事あるしるげ色ハうさるるて安藤直
次小はききて志きりまひききやうつひよはゆらハ
那うううやうて父の遺領を分ちむひ彦根十五万石
直孝よ下され上州安中三万石を直勝の隠居の料よ
下され直孝この時まで大番政まで執政のそまかよ
末望よ伺候せしう父の家をつくと後出仕にやまを
進出本多佐渡守正信の産の上よつく其体誠と傳へ
事終て後市前を罷立て正信よ向ひ今日の上まひ
無礼よこそ侍色去かうて故侍従の家をたたくし
との作を蒙ては上ハ向後のるりハ免あもとりまふ

信よハ今日の所あるまひ正信こそ悦びてそまきう
あんと志ろしめられし將軍の口ごとのふと者
さくらのふるまをこころるこそを足しとてあ人を
不めあつうし大阪の軍謀以とゆるくひそくよあき文
を廻し軍兵を振き集めんとし大阪の城ハ去年
天下此軍勢を以てせむきとちつとまうこころの事叶
をたこれ志しるうて故太閤の言靈加護しるう所
か^五年よころころ諸大名にない味方よあらんるり難い
ねんよハ再ハ豊臣家の御代とるらんるり遠きよせハ
うらとつひあつう四方の浪人志のひとあはるる

者ひきし切らば大野治房今ハとて小幡勘多博を城
中よりいともんとて京所司代板倉勝重伏見所城代松
平定勝かくときて西所所着陣諸國の大名を
あつするまでハ五十日も不と一ぬしその内よてきし
都よりいれ入宇治のあつりよ要害をうめ勢田の橋を
あせくるるハ勢ひ制しうらうらし城申りし此をうら
こと何んときハ景憲さきり止むしとてことと小
幡を城中より治房ハうき味方たつるとく社ん
ころよりてなし密計あることおるハ評儀を如し
かうその後軍後さつりかゝる中ハ城中ハ軍勢とせし

戦もんといふ者あるときハ景憲さきくこととを止むその
弁長流る如く時尤と同せぬハかうて評儀一決せし
事なり筒井伊賀守定次ハさきハ慶長十三年罪重なりて
伊豫ハ流さし浪人とし諸國ハさるいし去年大
坂の陣役ハ役いしよつては時定次ハ其子順定ハ切腹仰
けらる三月大坂より七の侍番頭青木氏部ハ捕一重并
常光院殿大藏の局正栄尼を使として駿府ハ集せ
らる是和睦の事礼且大所所踏次の事急しらく之
らせむいしを賀しヤし事についてハ大坂近在軍陣の
點より田畑あは年より豊るくけして家人等扶持し

かゝる色に宣しく御事断をあをくとの西使とそ

すゝくは時尾張宰相義直卿紀州より淡野小の方迄させ

玉おとく 大所所しくいふことせ玉お(き)思えらる

けさハ彼女房達を具せしれ婚礼のりりとうもくはせられ

りり都^{上りの}尾張^の氣^のる^るに大坂の僱^は後^は軍兵は時

りり新系古系を合せて十五万人に及十淀松秀頼

公も天の^はけと悦^ひ叛逆の軍を起され惣軍を三

ふりけ七^の侍大坂に後藤基次をもくして一陣とし

大野治長大将より真田幸村渡辺純明石全登等二陣に木村

重成大

将より長曾我部盛親本林勝永仙石宗也等を三陣とし

大野治房大将より大所所よりすむる俄に集る軍兵ハ

多きふと乱こやれしりの敵も能はとて馬出陣の市筋

を下し七道の軍兵を僱候しあふ大君も馬出馬の馬あき

あり陣くさうるの如く只越后少将忠輝は馬あきいふん

事^ハ祓^らる^るわ^らむ^とて黒田長政加藤嘉明とせり今

度の西使を乞儀あふ廿八日小幡勘三情伏入りのりり

ことく大坂の密謀をつけこの切よりつて飯系をあらされ

りり是よりさき或人小幡ハ間者るよし大野に告しあ

ある事^ハ討^をむ^ける^るその館をとり巻し小

幡をうらふ後うらうらうと氣色なりし治房うらうひて
召進一けし一人の下部を従つて忽ちある治房うちまゝに
防辺を間者とや若あつ防辺の二心るまゝと明白こととて嫁
小おきは来自由なるまゝしめしむるに依て安くと伏見より
進んでゆきゆきを得しうきし今月治中俄にささきいから大
坂の勢もささき入とて資財難具持をさし山中小かくとせん
とて又内裏をさしめ公卿衆の防館に杞さねとつひ
つとて老人小児を介抱し禁門まゝこれ入公家の防内ま
ま方るぬ所るくその勢ひ制ししし所司代勝重事とし
せは平日の衣服まてし道をあつめ入りし一番の兵い

たうけしてあ防所の防着を待りし治中貴賤これ
ま依て安堵しし王城のうらうきささきし敵慮ししきう
るまじうらうく戦城の名をけしりめ、まこの幸とつて
膽畧のふとかろるしと舌をさしししとを折る井伊
直孝本多忠政松平忠明近江伊勢美濃の大小名と東寺
小陣し藤堂高虎の淀小陣して治中をさ復せし六
人のうらういよし止らうし大坂所あるとき林信勝小坂
ふせて銅印細工の人をつとて活字を鑄ししめらるこ
の時成就し最初小群書治要をすて諸大名より
分ち玉はるし四月三日大坂の勢大和に乱入龍田法隆寺

を焼くし 六日大君の弟先手五ッ備所下知よりつて淀島羽ふ
陣をす急後陣をすし 九日大所尾張より暑うりて大坂の
使者を出され秀頼又軍を起し 洛中より乱こみんとすし
しその風あり誓紙をうそしして行てなまふりたり
くすて信を失えりやんこれより上洛してその罪を
西のしと 竹らる常光院殿をい大坂よりすこれ軍を止
しとの昔をやすとせりし青木一重大藏正栄は京都より
とめて御書を許されし 十日大君は参駕し 十五日
大所所尾張所参駕し 大坂の諸將は美濃の所軍むり
とすて防戦のまを後と真田幸村すし出て従来の如く人に

異又すしきんふ事よりし思はせに今世を
ふいし姫の娘ら色諸国の大名一人として味方とすり
す記を飛ちり多勢のよりくを結んす 謀るきふ
似り幸村の所存より急に都を攻めて 主上を死せり
七組の人より伏見の城をうそひりし 其余の大將守洛より
出りし勢多の櫓を切おし 志賀直高の陣屋をつ
し勢ひをゆるんせんとすふとや長曾部後藤が
みしき保しと一回も秀頼よりしとあしとを
はそりく唯あまきしとち極ふりる瓜をしこして
退出せり七組の侍大將とすをそりしとすしは戦

三面の水をさうり苟の一方のみ平地うれい東國勢いつ
まじやくうりふせきあるまじり某等すくつて軍兵十万人を
左右に分け命をすて、敵の面を陣のまをさつき入し
豊臣家の内運にせせられ、只一戦、勝利あるんとせし
秀頼尤と同一し、しるせ、移して陣をさあり、しと諸人の
ふ一致せん、万事俄るす、二の丸あり、柵むい
ひ、し、四の丸、二尺許あり、要害といひ、十八日大所所京
入る、帝光院、及う、う、城、中、作、の、音、を、後、ハ、ハ、ハ
よし、ヤ、ヤ、ヤ、ハ、又、後、後、在、三、部、ハ、ハ、ハ、和、睦、を、を
ふ、セ、玉、と、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、是、非、を、く、畿、内、ハ、ハ、ハ、知、を

つ、と、ら、大、坂、の、僅、後、ハ、ハ、ハ、者、ハ、ハ、ハ、其、妻、子、を
捕、一、降、糸、を、致、ふ、者、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、廿、日、大、所、所、伏、見
所、着、近、國、の、大、小、名、逃、く、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、都、合、所、勢、十、五、万、人
み、か、ハ、石、川、主、殿、頭、忠、總、ハ、高、槻、の、城、を、守、り、せ、ら、を、松、平、武
藏、守、利、隆、同、宮、内、少、輔、忠、雄、兄、才、池、田、尾、崎、の、城、を、ち、ち、せ
ら、る、出、陰、山、陽、の、軍、勢、ハ、神、崎、の、口、こ、より、入、四、國、の、勢、ハ、
和、泉、口、より、入、る、上、総、介、忠、輝、卿、大、和、口、の、惣、大、將、を、う、け
む、り、う、め、い、仙、臺、を、し、め、大、和、伊、勢、美、濃、の、大、小、名、亦、ハ、
ハ、ハ、ハ、上、杉、景、勝、ハ、京、都、の、守、護、と、し、し、て、男、山、ハ、
陣、を、と、む、か、く、て、再、ハ、帝、光、院、殿、を、城、中、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

秀頼は和睦をこぼし人々控へし七年のあひひ
郡山よりはるく任じし内々大坂の城郭元の如く
はくらひて拱河泉の三國よりし年々せんとこと
らと大藏正栄も内々御玉りうもくよこの事を
めしめらる青木一重のしるこめかきしう落城のし
席宥免あつて本領攝州麻田一万石余下し今か
廿三日大野道見も勢をひききて出まく乱射し民家
火をけつ堀の町家をも焼立りけり九鬼守隆向井
忠勝の軍船このまよはきしうばかききて引きり
廿四日常光院居り秀頼も免角のこと

うくとも淀坂をこしめ臣下の面々の中真りを破る色
まとやするまより井伊藤壺ふおんせて先陣を牧方
まてまの志めらるてきし所も備へしを高虎夜よ
き色不意にちとる大坂所都あて水野日向守勝成を
めしはるく大和口の先陣より一き大坂をまよはひ
ましる者るし大和國中大小名先陣もまよはひの
まら下知し任じしり達乱の者あら首切てのし
中せしし沙一方の大將うけ玉りうはおまへてむし
の如く一すち槍りて自らの名をせんる思ひ
とて先陣をりせまふ大坂治房二の勢を引して

大和に發向し九條をえぬのふとより押入民家火を放て
一度とときをとつと他郡山の城取らる筒井主殿舟定
度此よりをえて款何十万騎あらんといふにめりては
かるるしと一さくもろく城をかち山中よりれ飛らる
所水野勝成もや長池のあつらまてまゝにきて郡山の城
前よりとまきて南都に火をうきんとて勝成一騎に
まかけ出せしに諸軍をよぢれしと一回すむ大野
急をひきくをを追うけて法隆寺に陣とつらう落りま
らう筒井定度ハ西津所の水氣色よりしうれとすて
終り自害して失らうけり 定次の橋子
前よりくし 最初大坂城中を必死の

兵數十人えらひ都をたのむかき大坂所出馬の跡に
て内裏と二条の城を焼せんといふしに西出するものそ尾張
屋の市内よりせ者二人を捕て城を所司代勝三郎所
命當りしにくわめ捕て禁獄をこれに依て大坂所
北津出る数日は延引る及ふ紀伊国主淺野但馬守
長晟軍勢引具し大坂をむらふをひよをうらひ籠籠
吉野の者も大坂の方人して軍を起し前後よりう
んとり長晟兵をよけてうつらひ泉州櫛井近ひき
て陣せんとり廿八日大野主馬あともをえしに貝塚
より櫛井直之先よりなる櫛井より追うけらるる

野の味方ハ龜田大隅高細上田主水重安と守りし侍
志んくろしとくい留む重安直之人ませしせぬとくいし
う互に手厚めて相引よひく長晟とて合せてけきハ
重安ハ自創をきくと巻き回しく返し合せて高細等
かゝりひちきとてきしつひハ搦直之を初め淡輪
六郎三橋重次岡部大守則細とくいをとりて陣中
まけりてつて治房ハ遂りり以内ハ吉野熊野の賊を
家人等もてお破の首余多献せし依て長晟又大坂に
むふし五月一日大坂の諸將秀頼を供奉して郊外ニ
勢をくろし茶臼山より防戦のまをめぐりしこれ

と衆議決せりして止めし五日大坂所京都所發駕諸
軍ハ二日の腰兵糧用盡すき昔時不知ありゆりて
松平常慶といふ河内國の命せし白米弄弄干鯛
一ツ竹筒茶籠味噌醬油を一ツの長持に入させ其外の品
毎用いしと作られこの日河内國星田より着陣しむし
大君ハ伏見より河内の浪奈より着陣し豊前國主細川越
中舟忠興去年の軍ハ作を蒙て在國し薩ノの押一
ありし今年ハ早舟よりきて勢古の津より着し郎等
わつち教し得たりと星田の陣陣よをせ系る大坂所
所感斜るり本多正純よむりハせし此度の陣陣よ

中守ハ多勢ニ待候モセキ事ト云々思ひしハ
ころハさうらうと信らば軍勢なきに依て本多正純が組
ま加へらる大和口の先陣水野日向守軍勢を二三百にけ
堀丹後守直寄松倉豊后守重正に属し日限を定
一同に進ましめんと此日重正日限先立てひそくハ
折出しうハ直寄この由をゆていり其の者ハ追道ヤ
者と回ふせんハ一つの追道有て亀の脊と申すされ
とはなるむと物部守屋の敗北しる不吉の例と
うらぐよりヤ智利し鎧武者の道々ぬ所にてはヤ直
寄きて武士の戦場に出るわらハ尸を原野にさらさん

こそ物ハ不吉ハと云り覚悟より守屋ハ敗て死し直寄
ハ捕て生んと志す人々色々者もとてけ出し直道
こゝて河内の玉分つく重正おれてさう丹州の丹後守直寄
智累と云ふ下あはれと感しあつてかくて水野日向
守勝成大和伊勢美濃の軍勢并伊達政宗とあひし
よ到着し惣大将越后守将忠輝卿ハ南都ハ市陣を打
せむ此卿元よりあはれしき生簀こころを老し
軍をやしめあはれと人々あやうししハ花井主水と云
大徳病者よすうさもして市陣をす先むりハ政宗使者
を以ていなき市馬を出さるハ一由ヤましくむこと

主水とかくいしう一箇とすつる大坂城中ニ評議始
一致せし此日物見をいして西所すすは下向のよ
注進せしうは後藤基次評議の座に進み出てまともや
近付て無益の詮議そのうひるしかりくはあふり
し玉一基次ハ所存はあつて軍せんとひひすすあつ
配下の勢引具し其夜南のちち打て出河内の古市に到り
この要前すすもの川あり後藤基次田の森あり屈強の
所所とて人馬の息を休めり薄田兼相渡辺にかくと
きくうりぢれしと後藤のあどまあひてゆく大聖
等し今ハせんさぬく後藤うとせし叶ふしと後詰の

勢をさしむけ木村重成ハ河内の若江に陣をとり真田幸
村明石全登ハ同国道明寺長曾部盛親ハ矢尾に陣を六日
の未明に基次小のちまの鉄炮の足輕をちりく待りけ
るを松倉豊後守重正本多左京亮改成一とて
ちちちちされ敗れしけるは堀直寄つてきてまめを
松倉しとつてうし後藤の陣を打てかゝる形を薄
田兼相渡邊に知らせきり後藤は力を合せしより
皆一同に敗北を水野勝成に勢をこり合戦ひす
三合ふ及ちちち丹羽氏澄横よりつけ入る勢をけ
ししてちちちちを逃去るを勝成すきり進み

しよ本多政成を追ゆくてまゝ出合、色をし事ろく抄
そしらく」本多美濃守忠政松平下総守忠明伊勢美濃の
勢を引て後者薄田と戦ひしう仙臺の先自の將片倉
小十市景綱力を合せて敵方その夥しすてふ乱も
立んとする折や幸村全登きしうすくひ大野治長これ
はき其勢三万五千人旗色直してきりしう後藤基
次この時すてふ勢も厚いさう武者もろ十一騎を打り
され今これすてなりとて薄田兼相の人をきりしう邊に
命全ふしとひひし忠勤ををげし玉一我ハ此處を死處
と定めいとひ送るををり亂候を幸村もきりし味方村

死影しそれし又おのをを戻てゆ一を此候まで合戦と
叶ふすし薄田急な敵の横より打てし玉ハ人ハ某と一
戦はひかんとゆて幸村尤と同じ仙臺の勢も向しう
奥州ハすくくし薄田も馬多きまられしよき馬とえら
うてはるき士とのせり上より鉄炮をつりおさせ敵ひる
む処をすのさひををりて烟の中より忽破りしけ乱し
て追崩れ軍畧ろり幸村もて是を知り登田の東の岡
はあろう森を小指の陣をさし敵とすその間遠ろり
し疲さしう息をつけ胃をぬけと下知しけし皆か
ふとをぬきて休むろりてきや追はまししうも

さうハ兜をきよとりふ不とこそあも兜の緒をきめて鎗
の穂さねをそろへて敵むろふ片倉の鉄炮旗のまろ
まろてかりきり来る夏の如く打ちけり幸村真丸まろ
迎しのさぬ所よ一足し引る者もと下知しひしくと號
て聲くよ念佛をとる力を含てこくよ片倉烟の
中よりかり馬の腹を突通されて煙はきり幸村
大音あげまろしひくるこもて打ち死せると下知
槍取てかきし士卒一同よ上りかめ死て槍を打ちぬ片倉
の兵大よやつこ一支しろくろきけり片倉金の鐘の差物
にて米配をとる三度りうろ幸村道をてんし南の

思よ上る片倉ハ伏勢あましと素し進くる所を
幸村又かめきておとし片倉の兵死傷うけをきり
されと味方より改宗の旗本の騎馬の鉄炮しきり
雨の如く打ちけしり真田しきり追うる南の思よす
みろし後藤又き情基次ハ十一騎の侍とりまろ傷をつみ
再ひすもなる若仙臺の家等森み市森せり鉄炮の
馬も時息すもさるる郎等びりせ肩よりけ柳原まろ
る時すても息絶てり色ハ首を取て深田の中よりぬ水野
の家人河村新八薄田兼相をつき追てくひをとるし伊勢美
濃の勢双方より大野治長勢を打破り井上小左四利定

大谷大学吉胤の首をとる刑部吉隆の子 歎つひは負色をりしうハ
幸村しる勢よりあけ引く所は片倉景綱追うけり渡河紀
ハ幸村うしてハ叶ハしとて少くも火をちりして
たうふらるるを幸村に紅うせしとてたうひを走らり
歎くくく付死多し景綱ハ改宗の本陣つらうハ長追
とせさりうり「水野勝成改宗の本陣ハ使者をきい
軍勢を一つはあつめてすはハ歎ハる殺しとす
しとすめ本多忠改よりし人をせ此由を催促すれ
と改宗ハる勢亦死多く燔燻しつぎうりて辞退り
勝成怒てせひハ進こ玉とて三夜まで使者をきい

改宗うつら水野の陣ハあきそ固く辞せるみうり
せひぬく伊勢美濃の勢をきくおせんといふと是す
日く色よ及ひ不案内の地ハ深大さうりて辞退す
ようり道ハあともいふとれ止よりうり「越後少将忠輝卿ハ
伊達改宗の婿とてくくせあひ今度の合戦ハ期を失り
そく 両所の陣色あうりうりて合戦のまふ
改宗の方より使者をりつて出馬を催促しる色ハやく
陣をすめあふ花房主水大ハそれ路次のほと
急ぐせ玉ふくくくとすめ合戦かきりて漸く國分
市着なるハ一柳監物直盛この卿ハ陣のまふ

合戦の期はたぐれざるを口おしくやむい真田等々あ
とをききしめて切せんとこゝとてあつし玉りけくをある
河内口の面を諫めずれと一切用ひ玉りけく河内口の先陣
藤堂高虎は同国千塚山に陣し早朝は軍兵を分ちす
すめんとする折は物見の者をせうろ水野の陣馬場
あつりいといふより矢尾の方より侍大将藤堂仁左衛門高
刑同新七良勝左右より毎そ押ゆり渡邊吉光高虎
向ひ此更深田多くして合戦は不便利し外の道より押
いゆと中をきめ人をせせ先をきとめさせしれとす
入れしと揃押ゆくてきの大将長宗部盛親藤堂旗と

見るより陣を横みる大和川の土を蔭まかれはう采
配をききたり拵みせんと下知は高刑等てき陣つ
さるくをみるに逃出せとゆひ備をきしして川を渡
土を小上るとひとしく盛親采配振てうろくをきりい
あつりうろくつひに敗れしして高刑は討死に木村の侍大将盛
親は力を合せ藤堂新七の勢よりけ向ひ打破て良勝は死
す盛親逃る雜兵追うけらる渡邊吉光諸方の勢と喰ひ
契しく戦ひききし盛親は迫るるす叶はに吉光より
しらの畧より引退て勢をまとめさる高虎の本陣は
人をきせ惣勢をききめ玉いと乞ふ事三度あり及ふ

といふ高虎よりくしく動くは是ハ吉光の血氣を
まやう言名ふなるをにくみてきてたはされと本陣の士近
ま吉光は加らり盛親とあみ合て時をうづれし井伊直
孝ハ木村重成と若には合ひ先自の勢敗れしをい
直孝惣勢を以てつぎあまをを入くくくといふ
重成しことを死怖と定め槍少うあまし士卒を下知し
縦横無碍ははまてまらるるこふ山口修理亮重改ハ去
慶長十八年正月罪を蒙りて事ろく所領悉くぬ
せり武藏の入間ハ塾居せしは去年の軍起りて
高名して帰系をうる一んとせりい子息伊豆守重信長

二郎弘隆と郎黨少くを具して海道ををせしう第根の
関てとめらむて引くし今夜の軍よ至て父子さあ
か山道より志のいしう井伊家のまゝ属し今日の戦ハ父
重改二男弘隆双るのまをさきしして重自負ぬ嫡男
重信今ハ是よりこゝて真先ふすも馬武者二騎切て
若し田の畔ハ木村重成ハあまをえんてよき敵そとてか
ま向い重成槍とりのつてつき若し重信ハ首ととり
ま腰打りて一息つんとすもを井伊の家人 菴原
助右衛門と名のり引組てさし通し安藤長三郎といふ
とらてりう 重成今年 山に左馬介作間藏人内倉新十郎ハ
二十三才

このときさうし敵つひに敗北を直考追うけておとる首三百
十五山口重改此切よりつて後日めりうされ本領を下さる常久
一万石余井伊の遊軍長宗部の旗を肩かけ横を切てかゝる
渡辺吉光よき加勢得りうとて騎馬武者一同よとけと
馳出させしに盛親さうしうりて逃出せを追うけて
おとるくい影しく平野川まで追ひしは橋の上より一人の
大将錦の陣羽織をさうるう馬を扣へ長刀をういひし
る敵を待居りう藤堂の家人磯行尚うけ寄て名乗
せしとせむれと名のふれ志りし戦して得りぬ殺すてむ
せと細くし上さかう磯の首をわんとする所は郎黨

から今い磯を助けてそのくいをとるうらひをぬきて
改むせと名を志る澄接はるうりうりて後年よりう佩り
太刀を澄接とし増田長盛の嫡子兵太夫盛次る事
を志るうは人関り原の後尾州家よ仕一福千石を玉り
去年の軍は味方よりいしうはな軍よ至て大坂よ志の
ひり盛親のよま属しう父長盛配所よあまふり
その命を金うせんよ名のうて討きりる志のふとこ
やけしうき盛親城を出る時生勢五千と称せし
逃るなんて志るう者十騎よハすきさうしかくて
渡辺吉光ハ平野川のふとるう志りし人馬の息を休め

再び高亮の本陣を人をもてせし旗本をすしめ玉りし
敵一人とあむされ討たる處しと僅に色も高亮
ゆり進め玉りし小童めり何事をつしよや以て軍勢
を引退けんとせしと吉光決してきてみれば折れし
所目付二人集り合されしは吉光出玉りかされり
かた敷いなるもの盛親すて遠く逃りしとせし
道明寺の敵もこれに道よそよりゆりしはるん猶受て
討とるる一人しのみすしき免て今朝し大和川
での敗軍ハ先自の將高刑良勝が尺あるき軍してむ
た死しるあてとせし一今勝一を足るる主と

高亮いふやせし旗をうこし進めたるを口惜き
みはすや 上使衆の口宰斯を仰き祿子所しせ
る二人尤と同じし由言亮おやせし言亮これとせし
うらりし吉光のあしよりいれ道明寺の敵あつくる
吉光もて打つてはせし驚きとて敵れはくは
かとい言亮さしよ使者をつしし吉光引けよと下
知を吉光腹ししあしりの人家に火をかけて引よ
り主従の間をくくしよるは世流つてのせし
吉光ハ藤堂家を立退き浪人となりて死に吉光ハ
かめり智慮はなかりて主無礼なり高亮を私の怒を

以て公けをおろそらに共世のそしをうけり
柳原遠江守康勝ハ松平周防守康重小笠原兵部大輔秀
政仙石越前守好俊諏訪安藝守忠恒保科肥後守正光丹
羽五郎左の長重と共ハ河内国吉田菅江のあつり陣を
立て敵の大木村主計頭宗明と戦ハ長門守重成の御父宗明死
りのねい切てまゝを柳原康勝馬をかりて大音
上て士卒を下知を折おし風毒腫物ひ鎧ようこの
たつとをりのもせいつひてき陣をうけやう
井伊直孝木村長門守と戦いを合兵とて同じくす
み戦んとハ大所よりそくられり藤田結登守信

吉これを制して敵ハ地理よくハしあの菅田の毒ハ
さる幾ハ勢引くし味方勝みのりてみられん時
お出とらんれと覚ちるそとて進ませハ小笠原秀政
康勝ハ力をそへ再度まで進すとすれと信吉備に制し
井伊己ハ勝ぬと又ゆ伏兵今ハ起らんそのうき打破て
すつさまのをとついんもなむおハハ破色は
しるのちはるの依て信吉ハ山谷を蒙りぬこの報
秀政本陣出雲守ハ又系しハ藤田うこめハ制せり
ま首つと得とれぬの戦ハ討死と覚悟して
一足引すしくせんしハ出雲守ハあなすて越

度して 大所所の内争を告ぐるつとて明日のつとてか
ひふいさきよく討死をとけあけ貝ハ守りしと互に契
約して別きりり 此日西所所河内の平因は勝着陣
大所所の作として明日の軍は加賀少将利常越前少
将忠直秀康卿の藤堂井伊をかぎりて先陣し石川左殿
頭忠總京極西家の勢とかけめ京橋を向ふと
定めらる越前少将ハソの勝軍あつて家老本多丹
下同伊豆吉田修理萩田主馬後見しとすつと々々の
戦は井伊の後陣とす一ころ首一つを献せしむる
夜に入て 大所所丹下伊豆のあ人をめさし今日の戦は

汝等登寢して居る日本一の大憶病者と仰りて
西人かそこ入て退出し少将の勝前と争う各命かご
そくし明日先陣を言らぬふら花をさし軍しるふ
一し某等も命をすてはんとせハ少将も明日一番に
城を攻入すは忠直も軍勢もろもろ戸を城下をさし
陣中をぬきしふハ大坂城中は合戦の評定あつて明日
ありまをすしてあつて出ハ一戦は勝負を決せしとて
秀頼の内出馬をすし幸村謀をみしし今明石掃部
の勢船橋を守るといとは方は款迫らぬこれハ無用
の事々明日の軍は幸村諸將と命を争り大手は

の敵を打破す。明石掃部ハ今宮の表より真直子
進ミ狼煙を上げて合圍し、寄手の本陣目かけ弁入
幸村合衆を以て真直子馳付双方より戦らん。秀
頼ハ勝勢をすめはせ玉り勝をとる幸ありと云
皆々一同し。明直ハ七日志のめ幸村ハ茶臼山ハ陣し
秀勝長その東ハ陣し大野治長又その東ハ陣をハ
大野治房ハ因山に陣し御宿越前守正倫その前陣より
その外諸将すもるる陣を横ハ三より寄手の表
より越前少将茶臼山の陣ハ向ハ玉り加賀少将因山ハ
向ハ其余諸大名魚鱗よつらりてす。西所ハ

まはしきあつくと押せ玉り道明寺のあがりうて
大所所馬駕與よりあがり玉りめき色花色布の帷子ハ混雑
所様より玉り所近習所鎧をすめとせり。いそ
汝等何事をするとせめとせり尾張参後義直卿
遠に参儀頼宣卿 今ハ紀州 後陣ハそるり玉り大
所所より使有てお事達しいそき兵をすめ合戦の
をするる。ハ尺也あつくと作つる。大君
ハ黒糸織の所鎧より玉り所近習十人あがり
具して諸軍をめぐりハ黒勘長改加藤嘉明ハ
太閤の既述るれも。ハを揮りて軍勢か

具し多う向ふらる大君の馬印をえらぐとちの
不とうらまむくおしなれハ 大君志はし馬自體を
ひく會釈しあふときあ人進出で馬自體をすう
てき大勢とんていさうく振あせむふるとあめ
たてちうもハ大君ちうまつきて通りさあハ本多
佐渡守のいさ踏を押あくこれハ具之せれして柳添
の麻衣をきて箒輿を系うり黒田長政馬踏をちる
かめ 將軍家平日ハ威儀厳重なまし軍中にてハ
うつてうらくしき馬振あうとアセハ嘉明(うき)
源家の癖也と子長改されいさ癖はこそあんられ

とゆきハ 大野修理亮治長諸軍をめぐり茶臼山に至り
真田左四郎幸村對面してきてすてみ近づきていふ主君ハ
さう馬馬を出さるはかくてハ士卒の競ひなりし某と謀
を出し(き)振あし馬返返て事うくアせ玉と云治長をせ
返て又ハ秀頼もや櫻陣門ハ出馬るり 本九ハ正門 諸將
警固し旗さし物いりめし立立一金の瓢箪の纏千
本の長柄の槍なる故太閤の時の儀式ハ隨ひ堂くくる者
さありき時みいりなる者ハ中出しらん君 馬出陣の
あは其踏ふて裏きうせんと企る者何りといひあきて
出馬近引しまつ治長のい進ませらる越前の勢茶臼

山に近くと押を敵より鉄炮少く打出してありし
幸村は下知を待たしめて是を制し小高き所より城
のうしろをうめ飄撃の纏は何とて出さるやさては敵先
信幸をもしめ一族多くは関東の味方とて幸村をうろ
かえりてをあんさうハ人質をせんとて子息大助幸
昌を所城返さんとて大助父の袂すうり今年十六
歳に及んで片時と所うろてををるもいり只今討死の
際ふ逃しうと人のいんも口をしくい去年母上より
とてまうりし後女のいよりるをてておん事ハ秘り
まうられ共合戦の始より必父上と同じ枕に討死せよわう

そめま名こそ惜る事と誅められしといひるもハ幸村
城よかつとといひし秀頼公のあしめるり実子とてとて
る一きや頓て冥途まで逢一きを忘はししの別世を惜む
こそ口をしくとて城よすおれととり付く
身を放せハ大助名残をしく小父をんてさうハ冥途
までこそとて引おは幸村大助を足送うておつる涙を
押一きのう誉田まで痛むおひし弱る体の足されハ
も最後ハ人ハ笑ハましとて安しといひるも
やこれと秀頼の出るはるうま本多出雲守忠朝ハ秋
田城介実季六郷兵庫頭改乘等と越前勢の

右より進しうをこへてきいよくさこき立真田は今は
これすてなりとて森勝永を本多の勢よあさるや
その身ハ真先よすもて越前の勢よ打てうは越前勢
も今日ハ大事の軍るれハ皆死衾やとて一息しひうい
とくふ此時忠直卿の本軍よ先陣すてふ軍もしやうぬ
告あうしうハ兵糧つらとんとて心静よ支度し果玉ひ
こまよてよし鉄魁道よあましきそとて馬引せそ
ひらうとりの鞭鎧を合せてせ出玉一かれしりのとつ
はく大勢真田の勢よ崩さるう内舎弟伊豫守忠昌卿
もつらう敵の中よかけ入て三人止切てあし 吉田修理ノ秋

田主馬一ト備の勢を以て横より迫り敵さんく敗れし
流る血川のぬしこ内宿越前正倫といふハ元ト越前
家の内家臣より合戦の前よ書を内陣よあうせ正倫
今所敵と成てい一とて後來主後の好を思ふこあはき
よき馬一足取らういハいさきとて入討死仕らういとあり
る急ハ忠直ハ一敵あうけらう事の者らうとて内馬を
玉ハる正倫らうこいハるよのうかこふ一さるあて幸村
陣よあきしよをや合戦始らうこはかめハ陣ようる
いとあうくハはくとて死らうぬのうとて節等に
つらうとつらうの馬よむちあてハ縦横ようけ廻り

郎黨ことごとく討てその勇も野木右近より討て
けりし幸村ハその軍兵より下知して戦ハせ敵方ハ中
々々といひはくして本落ハ休ム所を西尾久作よ
せ合せて首を死し大將ウカウカ上ハのる系武者
ハ迎ふといひ安井のあつりまて越前の兵退却して
三千六百出雲守忠朝も勇とてくひし勝永本多
ウ先陣ヲ退け兵を分て秋田六郷を以て敗り味方大
敗北せし忠朝一人ウ留りか一せ者といひ甲斐なし
といきま声ヲ付込めてき二人まて鎧ヲつき留一人ハ
胸をうちめつる馬よりとうとわらぬるる太刀をぬ

きてその敵を切り斬るる来る小姓一人鉄の棒をこ
いし弓もよれてお振るる言の太刀もて又八人矢たふ
切てすてくるるその勇も痛自あつる厚い溝の中におり
るを敵を合せ首死しる三男此人子る死する甲
斐守政朝にお績るるめらる小笠原兵部大輔秀政ハ天
王寺の東門にて竹田永應をうち走らせ敵のあつる
合て討死す其子信濃守忠信父の手の真走りけ大勢の中
へまつて入あつるふて槍をうち突すくめつる
家人ももすて救ひし程るく息ハ絶つるる舎
弟大學助忠真生年十八才てきの陣をうけやう

かけ通りあさふ胸をつらせて倒るるを家人等
澁多見縫殿安積覚三情故ひ出し命全ふして後豊后
小倉十五万石玉りり兄忠倫の子信濃守長次寛永六年
叙爵し同九年同國中津八万石給をり加賀少将利常
大野治房ととくひ敵し味方し三万人加賀勢をこし
色めきて又利常怒て先に進しつとく
下知するなとく敵さくくくるいき立治房一番
あけぬれを稀存すてあさふをきて又打破る折る
片桐元才宮城丹后守石川伊直守の軍勢横より付
入りてき大に敗北し城中に逃入り加賀の勢城際

まで追つめてあさふ首三千二百し森勝永捕よのつとく
酒井家次も陣を目つけ喚き叫んでかけぬれ内藤等刀
忠興松平丹後守康長酒井小力を合せあさふを
折りり丹伊直孝藤堂高虎天王寺の東より七組の備を
あさふをこきりあさふを合せて又勝永を打破るし水野日向守
勝成本多美濃守松平下総守堀丹後守と圍かきあ
さふとき大野所部使を以てあさふの合戦よそのあさ
兵討死も多るるあさふ今日ハ佳吉きて本陣を待合の
あさふと作はるあさふ勝成頼て佳吉の方よりあさふ進
しり遙く桑田山の馬煙を忍てあさふ合戦ハあさふ

そ用るべき住吉より何よりせんとして俄に旗をてん
— 天王寺より出てきてと出合る所破る諸將逐れ
てきたる南の方より追うる勝成は其の昔より流浪し
る此辺の地理よく知てるは城の南一面の平地にて味方
の人々かゝるをむらめしめしめし切名を立し
と申す大和勢を引て北の方新田に赴き明石掃部
介の兵をひそめて今宮の平に於て出合ぬ一二三合
戦ひつる双方も目ざし敵をあはれとて相引あし
掃部は南勝成は北に別れしかくて掃部介は茶臼
山の戦い破りしをえりて返りしと知て跡を引

之生玉の方より大君内旗本の先子阿部備中守
正次高木主水正成作をうけて加賀勢の左より勝曼
よりすそ出て掃部介と行合ひるるき働きしそ
亦破る掃部は只一騎逐る石川四知名重之
嘉吉大内
所の旗本よりさし抜うけし高名をせん
こゝろし玉造は只一騎むらむき首をてくるは人武
の達人よて又後書よけり持致のふかれかくせぬ
大坂をひて抜抜かけの咎よりつて内應を致るを得ん
浪人よりつて都に遊歴し藤原清よつてひり
の後老母をやるんより紀州の浅野家を侍

下り所側より者合ふ人好むうめくくをとり此さ記り
大所所此所旗本も乱れ立しうハ 大所所騎馬よりてサ
くろ多し志つたれ者たと聲言るる不罵り玉ハやうて
志つた不本ぬハ以時合戦以り勝負を思ふことさし
城中より大野治長速水時之を急よる道し
大事の軍隊あつといふより二人ハ以り合戦より及以俄
馬下をひきうり是を以り城中より切あつと
以り罵るかとをあれ軍中色め記之太刀具是をすて
あつた迹迷味方の諸軍城際より追従てサ
くハ一万五千 大所所ハ茶臼山 大君ハ困山ハ陣を

進め玉ふ城の方より兵多くをせくるあつた味方と作
ら進し不所供の人と其の旗を以りて植村出羽守家改す
み出て家改して来るハして同主膳もむくひさや
事終て馬を馳に植村主膳 大所所の所よりむ
ういそ阿志ハ味方より希を以り不故よてきよあつ
さるるりを志るやと作らさんハ家改某も向ひむけよ進け
まハりし所てきちるさんハ馳ううやさんハ陣を
らささんをとるふハ 味方おさんハハり色馬を
めくして押りるんうささるさんまえかけよせ
うち死すハ我方すいをるんて速よそよしを

せとちゆいしう馬をめぐりししんふとよさてこそ味方
といえんしとゆいとやけしん家改の謀ふことふゆしん
らうと深く感しませ玉ひぬ大野治長は度の乱と
作の時駕者あつて大野の寝をいをねんとし刺殺し
て血影しく流せしこの時をとりその創痛を出て
絶入るをうりるしう郎黨をとりるう梅津門で秀頼
と兄弟を打ちて敗軍の注進士の齒を引りぬし速水
時之あるをつき今ハうやうにゆは出て戦ふ事叶わし
城を枕にして討死せんうかふすまねるくるとせし
秀頼も引くし千重を空を志めらるし越前少将の如場

までせめし人家を火をうけ玉ひしうを城中に内應の
者あつて治長の館に火をうけ焼立しう忠直卿のまゝ
力をいむひる羅橋よりすし京口門をうまひしう本
城を攻めて一番の旗を立てし水野のまゝつき諸軍
をり門々を攻破てのり入りし但吉田修理のし天満よ
りししんしんしんしんしんしん大坂の旗奉行郡主馬良
列秀頼の時旗をもちて千重をいり良列城
外よりうち死をとけしししししししし旗を敵よりしん
すし死しめししししししししししししししししししししししし
太刀を咽ふあつしうつ伏するつて死れ七組の大將

多佐渡守まつしめてよきやうふいめむしとよまらう佐
渡守の陣は侍して真直正信茶臼山の陣はさる也
あき御臺所希有まして近きういふい秀頼公御母
子のいふ形もまの事執しるまの命ハ許さず
と作らる大君ハ何とて秀頼と共に自害せぬかと作
らるかくて大君茶臼山は出あつて勝軍のまら
をのいふ大所所はとき床几はかくりしとまひやりし如
くは衛軍ハ一つ片時し早く因山はゆて用心かこそら
ははあつしとゆらる次は越前が將又まらしとまら
大所所は悦びまらう今日の一番のう神女のまら相とそ

家康の孫るうらうとゆせ次は越後少将忠輝卿御
前は出あつし又むきしし玉をいふ御側の衆はヤン
らるはうらる隠病者ハ何の羽のあつんとゆせらとて
花井主水をいふはゆら如きかのてまの首一ツ二ツおせて
送らしるの不思議さよとおろせらとて忠輝卿おそ
こ入て退出しあふ今日の軍は尾張参議義直卿遠
江参議頼信卿ハ後陣はさるまらうとゆひ頼宣卿
生年十四才まらしあつし先陣の小荷張御陣をこえ
てひきまらるすむをゆせし先陣すら勝軍
し陣屋をかまふとまらう合戦のゆら出らし

ハ口惜うも一しとて采配かつらりみふらんをせぬ
義直心つてきむいしとてや天守のふも火のふあり
ふもハ茶臼山の陣の事等々ふ
首一つとせさりハ残り多しと作らば頼宣卿さん
ハ頼宣は先陣をむりさうし故ふ今日の戦ふあり
うんくも口惜くいとて陣候もむせぬふハ松平右衛門
大丈正綱陣心をなくさめんとて殿ハ陣中となく
せぬハなる事はハ幾度ハあふせぬいふんさめハ恨
中させぬいふと中せしハ殿以外ハ陣氣をそん
やあハ綱頼宣う十四歳ハあふ事ハ再いやあふ事ハ

けるハ大馬所世ハ馬娘ハふて今日頼宣ういふる
軍中ふんう只今の一言を言名る事と竹あふ水
野日向宗勝成細川越中守忠興を娘として馬前向
候の大小名陣内外様の人々これをすて虎め子ハ地ハ
此色ハ牛と合ふ氣ありとふ本文ありあふおそるし
此馬心やと替舌を振いうしかくて諸大名馬悦ハ
事面ハ残るるハ余命ハ中ハ大馬所小山大
馬守三尹をめさし城中の火をゆいさしういあふ
いふふと竹あふハ三尹只一目アてかるうとて馬事
いふハ福と中を以ハ人ハ秀頼ハの馬傳役ハ竹付

らばし秀正の子息しと記す所前みる人ここハ以
る不思儀の事答を中者より見る所不審を蒙
るべきと大よかとりきぬ 大所所守取止汝も故太
閤のせうりよつきそ彼家よ疎くぬ者るふかき思ふ
理りなりと 你下さるあはせし思ふる所氣色アてさせ
とふいろうふふ年集りたる人この中よ豊臣家の
回恩を蒙りし輩よりいなかろしし世に何れ
事よそかりいふ此度ハ大所所宿老の人よむい
玉ハ大隅守にせし所神女ゆりるると所感
先あきく人よと大量のふとをかしくしと所

はらぬを 大野治長使者を所陣よとてあつる再度
よそ所従よ違背 今日よあるは成おそれ入替り新らう
作き形ハ所仁惠のゆけをりつて秀頼母子助命に
付くまんとハ治長をさしめ所家よ對し馬引よん若
ことしく誅罪你付らぬも又よ遺恨よせんしとそ
まつるはと述り折る日すてにふしうううと使者に
石挿いらせ 井伊直孝よ信せて精舎をすまらせらし
安藤對馬守重信石川八左門正次所目付と書る治長
倉のわらふ焚草をつめて所下知を付りしこの日
武藏守利隆 池田 尾崎よ在て城の煙を足神崎をり

王途る雜兵を討とうし生捕て献るし毛利甲斐守秀元軍
船を引て傳法に着し首三百余切て献り加藤式部少輔
明成^{嘉明}の子と本團より軍船よりめつて川口より首百余
切て献り石川忠總京極若狭守忠高同丹波守高知に
言槻よりむ向い備前迄まで仙石宗也を打やうり
松平兼壽に杜口より向い金森出雲守可重に岸和田に
むうしついで首余多きうて献るし此度の軍に敵統
城せしめて只あ日の間は勝敗決し遠國の大名を系
み及むにといし市谷めなりうきし言初大市所の市下
知は城攻まかろうハ天満口一方にひびくしとあるんはに

より城中の老弱又うはよ是らめ下郎に命助り迎せし若
影し八日朝本多上野分正純備倉に集む人数を改めか
て又かた甚十郎直隆作をうけむいつて集むむい治長
倉中の名前をわきまをりし出させ秀頼の答糧くんと
いし格別の沙汰を以て高野よりり淀殿より一万余あり
行はせ小姓近習女房の衆々この如く在仕はるし昔をば
いし治長畏て倉中に入り上意をつとむりしあうり
おきくろ女子助命を豊るに上いとも市陣に系向し
市礼をのいしうい志る不焼あとも聖系に如るうり付死
死骸等をいししその上あめこの人中に面をさすらん

しつこくうりし二丁の智籠を玉らんとてふかや凡
以昔を井伊直孝のちかこい直孝うごまてはいつるる偽り
あふんしをうりしとて陣中より一丁の智籠のしあり
秀頼のいるるまうしとつらししと倉中よりい
せいかぶをのそく使者往来事とてい直孝安藤對馬守
耳に付てお君の御仁心より猶も女子の助命をあらし玉
ととこ大なる禍の根をのそい心得玉とくくくと中
より倉の中よりむい鉄炮二放し放させく速水時之
此体を素し今ハ助命し叶はせ玉いせにひさし自害と
すもこい淀殿 四十才 秀頼 二十才 向ひて生害はけ

らこ治長時之を始として森勝永竹田永應氏家内膳道具
真田大助幸昌津川左近大夫等廿三人女性にて餐場 淀殿姑婿城川大
藏 大野治
長の子 宮内 木村喜成
の母 正栄 渡辺
の母 を始として十三人同し枕に伏し
る頃て積草に火をうけ一片の煙とるし豊臣の家こ
う午の刻大所所俄に所発する束する都二糸の城に入
玉に九日大君諸將を伴せて城門をちりしめ死骸を
固り埋めさせ 今の骨
塚 血糸して軍神を送り伏刃の城に入
玉に安藤對馬守重信等所跡を苗で後陣を奪ひし
城中燃跡より黄金二万八千枚白銀二千四百枚目をぬり
秀頼妾腹の子あり國松といふ今年七才なりし

行情を以てして追捕嚴るる長宗部盛親ハ男山子
逃かんと居るを阿波の勢より搜し出し生捕せり
すつ。渡辺弘ハ落城の日大野治長ハむらひもかくし
秀頼公を一先かき集むせむ。そこかしこもよる
為りて時をまつ。しとして近江の國ふとのひあきし。
秀頼公自害しむふと安て腹切て死に。伊東丹后守長
實ハ七組の將の一人。天王寺の合戦ハ亦負てうろしり
城ハも亦あき。高野ハ落。あき。そよりの内使をう
けて腹切んと。岩佐右近ハ壽赤座内膳直規等十餘
人の近習の衆もあき。妙心寺ハ亦あり使者を待て腹切ん

とふ。大野所このよす。あき。るき浪人等ハ大坂の怪
徒もあき。集り。ハ再犯の罪もあき。ハ。し。
大野治長等ハその張本と。ハ。尤も。あき。所。その他
豊臣家譜代の者も。ハ。秀頼ハ忠つくさん。ハ。勿論。
咎む。ハ。罪。ハ。し。つ。切腹を留め。ハ。十五日長
宗部盛親以下罪重き囚人七十餘人首をえ。ハ。京。
ハ。國松丸の落。ハ。し。とき守護の人。大野治房。金沢
余多身つけ。ハ。し。を生捕て。ハ。廿三日六條
河原。ハ。首を刎させらる。ハ。館林城主榊原遠江守康勝
風毒腫。ハ。廿七日都。ハ。於て卒去。ハ。大野

接へさせしうつり位言ふて焼ふる事ありて存せし
此に病中より駿府より赴く人々豊臣家の滅亡
をいふ事ありし余も途中にて心相氣の如くあり
同一若しむる事ありし駿府よりつぎし命終ぬ
子息出雲守高俊の父の遺領玉つる金弟貞隆と和州小
泉一万五千石玉つる六月松平下總守忠明と大坂の城十石
玉つる與平信昌の四男大坂所の
内外孫元伊勢龜山五石大坂の兵乱ありて
荒ふあれ果るを忠明心をつくし駿府の垣め堀石垣
をうらうらひ橋かけし町をこり高嶺をあつめて
一年のちとて紫花むしよかり後二年にて大和郡

山城よりつる全武
州忍大坂より山城代を置きて西国の鎮と
あり古田織部正重勝勝或は然
お作らとすしハ豊臣太閤の家
人とし若き時茶事をすし千利休の門才として此事を
そよし人の重勝を以て一世の宗とて関原の戦い東國
の勝方しとて貴せし大君の思ふ他も越ゆる然る去
年より大坂の謀を合せ近きし仕ふ茶道と木村宗信と
といふ者張本となりて大坂所都を立せ玉ひ大坂より向ひ
すつ時跡より主上をとり集らせ二條の城をすし取
て浴中にもくく焼く事ありし企ゆる所司代板倉と尺
ありハとて前より尺ゆ 先ツ重勝をめしと免く事あり

家を搦して陰謀こもくくを起しせしむるは時を
つらう誅せしむる宗信を始め廿余人の凶徒極刑に受
せられり重勝のて古き瑞宝の金きをいあむる
思ひ所ありて好まぬことい書画やうの物をい
しをいりてこをとり元の茶具を多くそこるい
破り又補ひつらうそを用ひる世の人皆異ある事
おひきひて世々金きあるらんとい大河内金き情
秀綱松平伊豆守
信綱の実父 常よりこの人いひて古の瑞宝とす
こし世の乱れ失て今ある所のりの神仏の加護し
こらく世々のころめらるるこ已き一人の好まぬ

ひてそとをい破り事必鬼神のみこ所をい
さる人又身を金くして終り事を得る
いひきその後く誅せしむる人々大におとす
てハかのころ相しんる中あつた十五日 大馬所御
泰内 備前国主松平左田門督忠継朝臣 池田 十七才にて世を
早う嗣かけい今月廿八日大君その舎弟宮内少輔忠
雄朝臣是れ大馬所御外孫
輝政の三男 家をつしめしこ三十二万石を
賜り忠雄朝臣の旧領淡路に収めしこ四男石見守輝澄
朝臣 忠継同外 播磨宍粟郡六万石を賜り 闰六月淡路を降
領質至鎮に揚るるこれを始としては度の軍功なり

恩貴玉はる人々多う中を井伊直孝ハ長濱五万石藤
堂高虎ハ伊勢の内より五万石加増せらる。廿一日大君御奉内
兵乱年久しく内裏の楽人四方ハ流浪し朝廷の先規
そのとあるありしハ大内所曰ころの楽人を召集め
玉の扶持ありし玉ありて家業を習はせ置き昔の音楽
に過りし。廿七日二條御城ハ公卿衆御入あり諸大名も
列席あり万歳樂延喜樂陵王入陣曲七徳舞拍鉦鼓頭
還城樂を奏せしめ玉ハ是太平の瑞相するると人皆ヤ
あつし。大内所又林信勝ハ御付らるる貞永式建武式ヲ授
て武家諸法度を定め玉ハ^{世ニ流布す}今日飛彈^{世ハ畧す}同金森

可重率し長門守重頼世をつくり本多佐渡守故太閤の
廟をふち玉ハ^{とヤ}大内所又玉ハ^{とヤ}容
易ぬる事ありハ勅裁をある玉ハ^{とヤ}公卿
衆諸親王家ヲ議して奏問しあふ七月勅命ありて
豊国明神の追事止め祭礼の式を割り像をは方
廣寺よりつし廟ハ破換し任せらるる十三日元和と改元
大内所時の関白二條昭實ハと後し多し朝廷の先例ハ
依て更ふ法式を定め奏問なる其大畧帝王の要ハ古ハ
の道をもよひ玉ハ^{とヤ}和歌ハ代々傳はりし道なるハ
廢し^{とヤ}現仕の三公の位もハ親王の

上より一江戸をむしめ諸大名の仕官ハ禁官の令禁め
外より一公家衆の養子も同姓よりむしめめふつま
事一公家衆賢行才学ある人ハ家柄を拘りて高官
ますめめつ一僧侶ハ紫衣をまはる公卿愈後
を経て破戒無学の事退けしき一き事其餘ハ令
十七ヶ條有り織田信雄入道常真大和秋山上野小幡五
万石をふして信長の後を定めし子息兵部大輔信良出
しを欲し今羽刈天皇
二万石一柳原康勝病死の後妻腹ハ平十郎
勝改といふ男子一人あり彼家の郎黨多し康改の時ハ屬
をめいし兵もいし康改の家亡ひるハ將軍家ハ

返さるべきと有り康勝類ハいあ有るれハみや家継一
子とて侍とせしとせしより甥なる大須賀五郎左門
忠次して柳原の家つをめし最初康勝の兄出羽守忠
政大須賀の養子と有り廿七才にしてゐるしくるむし
忠次三才の時國丸一家を継て参議頼宣卿の弟多し屬り
せしハ此時本姓より祖父康改の家をたき柳原
式部大輔忠次とめしハ大須賀の家ハ純て其郎從
等ハ頼宣卿ハ仕奉るハ八月四日大君江戸帰城廿三日
大須賀府帰城ハ越後少将忠輝卿の大板を打て上せ
めめ近に固守山の宿ふして大君の弟家人二騎

長坂十奇
伊丹弥藏

若黨十二三人引具しそ少將の所勢を押し並て打
てゆく所先を打し人々今何者なるを以て衆打仕るを馬より
取て引下せしものしる二人駈ぬげんとするを以て先
此人を追く馬集すべく道の不とりのおまの道に入る平井
三市三清安西右馬允追後て組て少せし報しを以て
てらる 大所所都を立せし水口より少せしを以て
此事少す我今なるて世あるをかく將軍ふむ
ひ無礼をせしめ我なるをん端のりやひや
ぬとて駿府より着るつて所紀明ありせ出さば忠輝
卿大よかそとひまひさるハ平井安西を以て

長坂伊丹の一族のみささる一と後せらる二人きり
深くうみ忽逐電しぬ歩侍の頭山田將監富永大
学比しをきそ早く我等二人を以て彼下の人あし
て所不審を十開くせまのさし訴ぬやうて駿府ふ
けらさる 大所所彼二人をまことの下の人としし由
そは松平忠左衛門頼て所使として守山よての根藉大
坂の戦ふ急ぐせし事且又都まで 西所所所参
内の時病氣と稱して供奉し候せは川道逢のいめよ
儀城の邊ふ出て目をくらし又いともを玉りてふ都
をいし間踏をててこちよ解り國家の大法を托ふ事と

中ふく辱しと仰つういさる尚家のまり人花井主水大坂
あての急リハ山田将監り志こさるりとやうけ将監ハ眾
輩て立退いり九月大君の作りて酒井雅樂須忠
世土井大炊頭利勝青山伯耆守忠俊を竹千代君の家光
傳役をさるあつれよき傳保の人こゝろとせずあ
まは忠俊とやハ故の關東惣奉行青山播磨守忠成
子こは度儀代の人こと同職を任せよきを深く感
ずひし若君目出しく生ませよきやうと思ひそ
かりて或時ハ包を和けけかき導きよきあり又或
時ハ顔を犯して控めあきよき事し度きありひ

しき若君をけりてくさくさきしし時めやれ憚ら
せよひしおとよおのつうり奉行いし正しくやはしきり
十月大坂所江たき起るやふ羽州山形城主最守駿河守
家親の妾腹の兄義成といふ人あり去年よりひそらよ
大坂よかよせん事此時よきて家見しそらよ
家親を修せて其罪を正としめらる家親をもちよ義
成の所領清水の館よ中しよせ一味の者よのころい
殊に十一月天下の諸大名よ付城砦の類こらちす
よき旨仰りよき又諸道の巡見の上使を定め
置りて國々の政事の善悪を察し三年よ一度の

巡見を例とせらる。大馬所参議頼宣卿を駿府の城
小うつし馬つづらひ別ニ城築を玉山人思をなりし
参儀いさし馬幼年より〜大坂の軍あり〜年
ろそのより果し玉山人此時に至り武蔵下總相摸伊豆の
あより数十日枯くしし〜十二月より伊豆の泉頭
を馬産所と定めし是より頼宣卿の馬事を駿河
参議と稱し〜今月大坂の重罪人〜
誅せらる。

元和二年正月諸大名年始の馬礼位階より〜官
版を着す〜昔〜年来軍陣の有様あり

目出度例をある〜廿一日大馬所田中の馬將持
馬〜倒る〜廿四日駿府より〜
大君より〜夜を日よ〜駿府より〜
昼夜の馬着病より〜茶葉〜
孝人の不と世の人感し〜三月大馬所忠輝卿
の馬母馬茶の馬方院長光をたせら〜
すら〜以外此馬毒色あり忠輝卿〜
馬〜かく馬勤氣最る事〜
府小越き〜大馬所〜
叶ひして臨濟寺を馬旅館とある。大馬所

かくまさせしむる後帝遺言のまゝせして伊勢國朝熊より
はるせむい同四年飛騨の國へうつさむいその後又信
濃國諏訪の郡よりうつさむ天和三年庚午九十三でがれ
あひまし十七日勅使廣幡大納言兼勝卿西三條大納
言実條卿駿府より下向りて大寺所を太政大臣の
任せさせしむる帝病中なる帝装束をつけらむ

綸旨に載しむる四月に至りては帝本腹あましく
思ひし帝茶をとり用ひ強ひて帝側なる女房達より
いとむ玉りて再び帝前よりあましくさるる者作らざれば
志女^{第三の}姫君始め蒲生秀行へ命せむいしを淺野但

馬守長晟に結納しむる七日俄に帝婚禮の儀式
を行はせむい十四日帝見舞の茶會せし諸大名こと
こゝろをこめて我病明日をい候らむし此身幸いな泰平
をいし將軍又天下の政事を数年任せし上はかりし
置事更なるし我死後より將軍も無道のあま
みて天下又乱きち各の内代まで天下の政事を治り
さるとまむい勿論し天下一人の天下にあはれむの本文
ありしは冥途まで何をうらむん皆本國よむと先づ
後日の下知を待たむいありと作らむ引出物ありむ
はる諸大名涙るる帝いとむいして退出せむい

大所所他界ありし人ハ数ハ府下ニ留置シ歸
國するふよしと知りし多キ一し小今日の上意ニ依テ所
大量のちと應伏しぬ其後大君ニ向ハせし我すて
治乱の道を諸大名ニ譲リ畢ぬ所事一政事ニとるを
留め家園よくありち多一と作ら也又竹千代君も相續
のちちをしく告玉ひ次に尾張駿河常陸三家の公達
を召し所事等よく將軍ニつゝ一達旨の故ありし人
と傳へも又三家の傳役成瀬隼人正正成安藤帶刀直
次中山備前守信吉をりしれて救導ニ急る處ありし
命せらる十七日薨去七十五才駿河久能山ニ所葬送あり

多き昔所遺言あり所吊の 刺殺下向参議頼宣卿
久能山ニ所靈屋をいそふ 榊原内記照久父の代より久能
の守護より多し 大所所の思を海より所小姓の列ニ
傳へし病重し多し福千石加増し玉りし我るも
後靈屋の事つらしと多しと傳へし此人の膝を枕し
して薨去すしと多し 大君 所遺言多し 大所所ハ天のるる英
其職を守りしめふ 今久能山の惣所門番と云し 大所所ハ天のるる英
明の所性質も文武二道をかめいそしるる世も
中子人となり強ひつて非程のゆふすいらく寛仁大
度ふして又書藉ニ耽り所高年よりつて所徳義

才のさうんよその師切業をるるよ古一の明主よ
すい家をとり一國を治めあつて大事より小事より
て熟練しあつて中よ世禄より法よりをるる先祖
の勤切よむらふれをるる智者の子よ愚人あり愚人の
子よ智者あり愚人の子よ福をなしし人よ
子の智者よりすむと作らむ又用ひし人よ用るは
大なる害あり高師直うかひりを持ちし人よ依て尊氏
うらむなりし人よ足利家よ石田三成より志あり
太閤よ怒しなりし人よ豊臣家をたすむる古も今も

同一心ありと作らむ大人は始を大事よ一し叛逆朝
敵よ味を人よ初めよりかめを仇といふあつし
只かより長して禍せむり身の置所なきゆゑよ主を
殺りぬるなりと作らむ又一心の理ハ天地よつめき天
地の道ハ一心よ飯をささむハ人の心の手やうあるる
の長短身の業枯國の興る亡ふハ世の治り乱る此を
決むること作り又書経ハ徳ハ心改をよむ政ハ民を養ふ
よありといふ諸我一代補をとのよ又政治の要よ
小あり人を知らざるをうらむるとハ孔夫子の聖言あり
人を知らば心よ依て具員ををるる後

へき事ことのうい又論語一人の備をもんるをりとも
るとあるよき教し鷹ハ天ハ沖リ鴉ハ水をくるとぬ
そまの能ある一人にて術藝ハうのまぬものとのまひ又
主人と執政の臣と心を合せ百姓を子の如くそつるま主人
ハ父の如く執政の臣ハ母親の如くそつる又文藝ハ金銀の
如くそつる宝とつる事とぬ者か 武藝ハ鉄の如く農
具より鍋釜の如くそつる必を鉄を利ゆれとるれてハ金銀
ふりしる宝とつる事とぬ又乱世のうもしるて血氣の勇
を武辺とつる合戦を武道とつる甚ひる事
武道の本意ハ暴逆ハ君を誅伐し百姓を安堵させぬ血

氣をやり合戦をのろろろけるかのハ民を安んぬる
事叶ふとつる言ひ又人の上の者言つて横柄るれハ
家人と心隔つて事事ハさしつる事多し心を
ひきく持ッ主人ハ家人ハおのつる事し何事ハ
思ふ候はうり易きものこと宣ひ又ある時序側の裏に
汝等家を保ち身を安んせんと思ふハ五字の口傳あり
ウヘヨミナ又七字の口傳あり「シホドヲミ」序病中ハ
大君を序逆して我死しるあとまで天下ハいなるん
と心付らぬいなる事と問をせぬさんハ又乱るん
とせんしとつる事ハよくハ心得ぬものなる

とてうれしけむ心をしすしきこれハ乱世人と覺悟し
しよふと治世をこめちめしんとの志心あり又竹千代君
は天下を治るハ慈の一字の肝要ありやめくこはれぬふると
信せらるつて帝目をささめふ帝祠の意味ありき事なるこの
類より今年帝社を下野国二荒山に改めぬふしき上意あり
末年春三月に成就を昔弘法大師此山を日光と書改め
られし由不思議の前表ありき四月大君日光に赴きせり
帝改葬の儀あり勅使下向ありて正一位東照大権現と
追号の宣旨を下しめし帝祭礼の儀式四日ありて果け
て寛永年中に大猷院及大猷宮にめし仕ふる事あり

んやうなく帝三家を始大國の諸大名も自傳しし
金銀ちりもめ朝鮮琉球阿蘭等異國よりし珠玉奇石
を献して太平を祝ししとあり

元和元年台徳大君帝位を大猷大君に傳りし帝在位十
九年寛永
九年慶安四年大猷大君薨去帝在位
十九年嚴有大君立玉公家細
延宝八年薨去帝在位
卅一年常憲大君立玉公細吉是乃子嚴有大君の
弟弟をゆりし宝永八年俄に薨しぬ帝在位
廿九年文昭大
君立玉公家宣是常憲大君の弟後弟に正徳二年
薨去帝在位
四年有章大君帝幼雅を立玉公家細享保元
年薨去帝在位
四年世つきの君すし有徳大君紀

